

# POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第19号 1992, 8, 10

発行  
北海道ポーランド文化協会  
〒060 札幌市中央区南2西2  
河合楽器製作所北海道支社内  
電話 011-231-8661  
FAX 011-221-4936

## 和やかに懇談

### ―ポ大使の歓迎パーティー

五月二十二日、駐日ポーランド共和国大使ヘンリク・リブシツ氏をお迎えして、歓迎パーティーが開かれました。

大使は札幌の市民科学研究機構という団体の招きで、講演のため来道されました。ポ文協ではこの機会に大使と懇親を深めたいと思い、数人のポ文協会員とはかねてから親交のある大使からの意向も伝えられ、パーティーを開くことを計画したわけです。札幌在住のポーランド人も含めて五十三名が集まりました。

遠藤副会長の歓迎の挨拶、大使のご挨拶、乾杯、会食に続いて会員の名取百合子さんによるショパンのピアノ曲（マズルカ作品32とバラード作品2の二曲）の演奏があり、更に大使から贈られたウォトカ（ペトロフ）も加わって、和やかで楽しい会となりました。

大使は大使としてのお仕事の他に

日本文学とくに浄瑠璃の研究者でもいらっしゃり、「ポロニカ」第二号に「バベルの塔、あるいは、失われた無垢への郷愁」と題した論文をのせていらっしゃいます。

次に大使の日本語によるご挨拶の全文を紹介します。

### 北海道ポーランド文化協会の 歓迎レセプションによせて

本日、私の為に素晴らしい歓迎会を催してくださいました北海道ポーランド文化協会会長・今村成和様に厚く感謝致します。また、お忙しい中、ご参集下さいました皆様に、心よりお礼申し上げます。

この度の北海道訪問は、昨年の一十月末に駐日ポーランド大使として日本に着任して以来、初めてのものです。とりわけ、文化のみならず学術分野において、ポーランドと深い絆をもつ北海道の地を訪れる



機会に恵まれましたことは、私の大きな喜びであります。

雄大な自然に恵まれた北海道の風景を眺めておりますと、ポーランドの地を思わせ、ふるさとをなつかしく感じずにはおれません。私のように、多くのポーランドの文化人、学者、学生達もまた、北海道の自然にこの街に、そして北海道民の皆様にご郷の香りを実感したのではないかと存じます。

本日は、これまでポーランドと北海道との間の友好親善促進に多大の貢献をされてきた貴協会ならびに会員皆様は厚く感謝の意を表明いたします。ポーランド文化協会が主催して、ポーランド音楽コンサートをはじめ、映画上映、専門家たちによる文化および政治講演などを催されたことは、道民の皆様にとって、一層ポーランドに親しみをもたれる機会になったものと思えます。

今後とも、皆様の活動によって、ポーランドと日本の間の様々な分野における交流がより実りあるもの発展して行くことを切に望んでおります。

最後に、このような暖かいおもてなしに預かりましたことを、貴協会ならびに会員の皆様を重ねてお礼申し上げます。

(一九九二・五・二二)

# ストラドフスキ氏を想う

小笠原 正明

今年の三月に北大から北海道教育大学の函館分校に移り、とりあえず函館で単身赴任生活をしていきます。スーパーマーケットに買い出しに行くと、函館の豊富な食料品を眺めていると、つい今から一二年前のポーランドでの「単身赴任生活」を思い出します。函館と違って、あれは大変な生活でした。

一二年前といえますと、ちょうど「連帯」の最盛期で、国中に清新の気が充満していましたが、それに反比例して国民の生活はどん底に落ちていました。みんな午後二時には勤め先をあとに食料の確保に出かけたものです。私も人波にもまれて、倉庫のような殺風景なスーパーマーケットによく行きましたが、食欲をそるようなものは何もなく、石のように硬いパンとマーガリンを買っ

て帰るのがせいぜいでした。一時はそのパンも店から姿を消して、「これは！」と思ったものです。ただし、私はいずれにせよ三カ月間の短期滞在の客員(準)教授だったので、いざとなったら国境を越えて脱出すればよいと気楽にかまえていました。むしろ、いかにも歴史の転換期らしい人々の勇気ある行動に新鮮な衝撃をうけました。とくに、私の世話をしてくれたストラドフスキ氏には、今でも尊敬と敬愛の念を感じています。

ストラドフスキ氏は、アメリカのアルゴンヌ国立研究所から帰ったばかりの私と同年輩の科学者でしたが、そのころウッチ工科大学の「連帯」の責任者であったようです。彼の研究室には毎日屈強な労働者風の人たちが集まって、猛烈な議論をくりか

えしていました。ポーランド人のおもしろいところは、そういうところで、外国人が居てもいっこう平気なこれこういうことが議論されているのだよ、などと解説してくれたものです。彼や研究所の人たちの説明から、刻々と動く政治情勢が一応理解できました。連帯のピラが初めて街に張り出された時とか、ウエイトレスが一斉に連帯のバッヂを胸につけたときなどは、水面下の大衆が突然すがたを現したようなめざましい印象をうけました。

グダニスクで政府と連帯の会議が開かれたときのこともよくおぼえています。彼の研究室には大勢人がつめかけ、つきつきに入る情報を真剣な表情で聞いていました。そして、どういうわけか、ストラドフスキ氏

本人は私との約束をすっぱかすことなく実験につきあってくれていました。そして新しい情報が入るたびに「ちょっと待ってくれ」と分光器の置いてある部屋を出て行っては、グダニスクに派遣されたウッチの代議員にあしろうこうしると電話で指令していました。私自身は、ポーランドの歴史的転換のときだ邪魔をしてしまったのではないかと、今でもくやんでいます。

私がポーランドをあとにしてからストロドフスキ氏がたどった運命は数奇なものでした。彼は一九八一年に始まった反動の嵐の中で逮捕され正確にはわかりませんが二年ぐらい投獄されていたようです。その後、大学に復帰しましたが、一九八八年にアウトバーンで交通事故に遭い、連帯の勝利を見ることなくこの世を去りました。そのことを私はドイツ人の教授から国際会議のうちに聞かされました。

いま私の手元には、連帯の最盛期に彼と行った研究の論文が一つ残されています。

(北海道教育大学教授)

## ポーランド点描

### ワタさんにインタビューをして

札幌に来て七カ月になる、マリウシュ・ワタさんに、ポーランドのお話をうかがいました。

ワタさんは、ワルシャワ大学日本学科を卒業。現在は北大文学部に籍を置き、日本語の研究をしています。

◇何故、日本語を学ぼうと思ったのですか。

日本語には、小学生の頃から興味がありました。日本映画を見て、音がきれいだと思いました。しかし日本語を本格的に勉強したのはワルシャワ大に入ってからです。

◇日本映画をよく見たのですか。

子供の頃、黒沢明監督は人気があり、ポーランドでよく上映していました。「ゴジラ」シリーズも、見ました。ワルシャワに出て来てからは古い映画を、特集を組んで上映するところがありました。そこで、よく日本映画をみました。



◇ポーランドのこの頃の生活について伺いたのですが。

一九八八年から八九年にかけてが一番苦しかった。物不足がひどかったのです。しかし一九九〇年からは、平常に物があるようになった。物価は高いが、物は何んでも手にはいるようになりました。

自由は完全にあります。民主主義国家になった。新聞・雑誌が、たくさん出版されるようになりました。世界のいろいろな国の出版物など、なんでも入って来ています。今の問題は、経済のみです。経済は最低ですが、我慢しなければならぬ時です。働いている一般の人の給料は食料品を買うだけ。そして、年金で生活している人は、もっと苦しい。今は、貧富の差が出て来ていて、中流階級が無い。

ワルシャワの土地値が、すごく高

くなつた。アバート代が高くて、払えない人もいる。家賃を払わずそのまま入っているので、国は収入が少なくなつて、困っています。

先進国の良いところを見習い、E Cの援助も期待できるので早くに復興すると思います。

◇ワタさんの出身地ミエローシュフについて、お聞かせ下さい。

ポーランドの南部シレジア地方のワウブジフから、南一五キロの所にあります。チェコとの国境近くです。ワウブジフは、炭鉱の町ですが、ミエローシュフは、空気がきれいなリゾート地が近くにある小さな町です。ワウブジフは、下シレジア地方で、戦前はドイツ領でした。戦後、ポーランドに戻りましたので、東部中央ポーランドの人が、移り住みました。建物は、ドイツ時代に建てられたものが多く残っています。

◇ポーランドと言うと、シヨパンと結びつくのですが、……

ポーランドの若者は、クラシックを聞く人は少なく、ロックミュージックが好きです。

七〇年代、八〇年代、ロックやニューミュージックをやっていた人達は、その歌詞の中に、政治的的制度へ

の批判や、生活の現状に対する不満を盛り込みました。今は、体制が落ちついていないので、新政策に対する批判をする芸術家が少なくなつたもう少ししたら、反応が出ると思います。

◇日本にきてから、気づいたこととか、感じた事がありますか。

会う人ごとに、(ほとんどの人達と云つてよいくらい)ポーランドは何語を話しますかと聞かれます。ロシア語か、ドイツ語ですかと言われて、ポーランド語があるのを知らなかったのに、びっくりしました。

しかし、札幌に、ポーランド文化協会があることにも、驚きました。ボランティアで、皆さんがいろいろな事をしてくれているので、とてもうれしい。

2時間あまりの取材でしたが、ワタさんは大変上手な日本語で答えて下さいました。同席の奥様アンチさんは、ワタさんと同郷で、ワルシヤワ大学を卒業し、小学校の先生です。お二人の笑顔が、とても印象的でした。

ハ文責 清水V

## ラジオ講座 「文明の十字路——東欧」

北海道大学放送講座として標題のようなラジオ講座がHBC(北海道放送。午後九時から四五分)より十三回にわたつて放送されます。最初の五回はポーランドと関係のある内容ですので、以下に紹介します。

○一〇月一八日「東欧世界の成立」講師 栗生沢猛夫

○一〇月二五日「東欧世界の成立、その二」講師 栗生沢猛夫

○一一月一日「ポーランドの政治」講師 伊藤孝之

○一一月八日「ポーランドの経済と社会」講師 吉野悦雄

○一一月一五日「ポーランドの文学」講師 灰谷慶三

この放送講座の受講生応募等詳細についての問い合わせ先は北海道大学庶務部庶務課学務掛電話011-738-0444

## 次期ポーランド語 講習会の予定

ポーランド語講習会は回を重ねて第十期が七月に終わりました。第十一期は九月九日(水)から始める予定です。初級は熊倉ハリナ先生を講師にむかえて、従来からの参加者による引き続きのクラスと考えています。

これとは別に、アルファベットから始める初歩クラスを開設しようという計画です。

九月始めまでには詳細が決定しますので、担当運営委員の灰谷までお問い合わせください。電話702-4939

「ポーレ」編集委員会

斎田道子・清水保子

吉田 宏

〔連絡先〕621-1738(斎田)

## POLE 第 19 号(1992.8.10) 目次

「和やかに懇談～駐日ポーランド共和国大使の歓迎パーティー」(1992.5.22)、ヘンリク・リップシツ「北海道ポーランド文化協会の歓迎レセプションによせて」……………	1
小笠原正明「ストラドフスキ氏を想う」……………	2
清水保子「ポーランド点描～ワタさんにインタビューをして」……………	3
ラジオ講座「文明の十字路～東欧」(1992.10.28～)のお知らせ、第 11 期ポーランド語講習会の予定(1992.9.9～)……………	4